

“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” と “Eloisa to Abelard”

石川郁二

I

叙情詩人 Pope というと奇異な感じを受けるほど Alexander Pope はイギリス擬古典主義を代表する詩人、それも風刺詩人として受け取られている。しかしその Pope にも叙情詩人的面影がないと否定することは早計であろう。イギリス18世紀という時代に生きた Pope には、その後に来る Romantic Revival 時代への橋渡しとなる作品がある¹⁾。1717年刊行の *Works* に収められた “Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady”²⁾ と “Eloisa to Abelard” は叙情詩人たる Pope の風貌が感じられる。

両作品は愛を取り扱ったものである。“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” は自殺をした女性が亡霊として現われることから始まっており、“Eloisa to Abelard” は Abelard と同じ墓に入り、幸せな死を願うという事で終わっている。各作品の主題はそれぞれ違う。前者はその題が示すように elegy³⁾ であり、後者は “the struggles of grace and nature, virtue and passion”⁴⁾ である。

作品に表わされる愛の形はそれぞれ異なるにしても、Love ということでは同じ範疇に属するものである。この小論は両作品における Pope の愛に対する取り扱い方、愛への対処の仕方、そしてその結果として起こる死に対する考え方を論じたものである。

II

“Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady”における *unfortunate lady* とは誰のことなのか。この疑問に関しては当初実在の婦人の名前が数名あがっていた。Caryll が Pope に問い合わせたことは分っているが、Pope 自身はそれには何ら答えていない。Tillotson によれば、誰か一個人を示す論拠が明白ではなく、結局不明という結論のようである⁵⁾。この *unfortunate lady* が実在の誰かということはこの小論の目的ではない。作品自体に表わされている *unfortunate lady* の愛とその結果起こる死について、詩人 Pope はどのように考え、それを作品にしているかを調べてみたい。

作品に登場する *unfortunate lady* は亡霊として現われる。それも劇的な姿であり、胸に短剣が突き刺さり血を流している。

What beck'ning ghost, along the moonlight shade
Invites my step, and points to yonder glade?
'Tis she!—but why that bleeding bosom gor'd,
Why dimly gleams the visionary sword?

(*Elegy*, 1—4)

この亡霊は詩人を手招きしているのであるが、それと同時に読者をもこの作品に手招きしている⁶⁾。光としては月の光があるわけだが、その光をも嫌うように亡霊は陰にいる。人のいない林間の空地に誘う亡霊は何かを訴えたい、何かを告げたいという素振であり、亡霊が現われる場面設定を最初の2行で作っている。

その亡霊の胸には短剣が突き刺さり、そこから血が流れている。その短剣が月の光にかすかに光っている。この短剣の光もやはり何かを訴えたい、気付いてもらいたいという光であろう。月の光を嫌い陰にいる亡霊、女性の亡霊の胸に突き刺さっている短剣、その短剣のかすかな光、そして流れる血、これらは作品に異様な雰囲気をもたせている。

この最初の4行で、*unfortunate lady* の死は単なる自然死、又は病死ではな

いということ、そして彼女の魂はまだ救済されていないということが分る。次に続く4行がなければ、殺されたのではないかとも受け取られるものである。

Oh ever beauteous, ever friendly! tell,
Is it, in heav'n, a crime to love too well?
To bear too tender, or too firm a heart,
To act a Lover's or a *Roman's* part?

(*Elegy*, 5—8)

この4行で彼女の死は愛情からの自殺であるということが分り、読者は少し安心して次に読み進めることができる。

このようにして始まるこの作品は、冒頭から愛による自殺ということ、彼女の死後のことを描いている。彼女の恋人がどんな男性であるのかは作品に描かれていない。ただ、自ら死を選ぶほど思い詰めた愛、愛に対して一途に思い込み、苦悩の果ての自殺であったろうということは分る。彼女は恋人を心から愛していたのであり、その愛を貫き通すほどしっかりした心を持った女性である。愛の幸せな結末である結婚という形で2人は結ばれなかったし、だからといって愛する人を諦める女性ではなかった。

さて、彼女自身についてはどのように描写されているのであろうか。作品には余り詳しい描写はないが、それでも大体の面影は分る。

See on these ruby lips the trembling breath,
These cheeks, now fading at the blast of death:
Cold is that breast which warm'd the world before,
And those love-darting eyes must roll no more.

(*Elegy*, 31—4)

これは彼女の後見人がその責任を果していないとして、後見人を非難する詩行に表われるもので、死出の旅路に出ようとしている彼女を描写したものである。彼女の唇は真紅であり、その眼差は見る人に愛情を抱かせるようなものである⁷⁾。彼女の心根は世間の人を優しい気持にするほど穏やかな温かいものである。彼女の四肢 (limbs) の描写がある52行では、上品で美しい (decent) という形容詞が見られる。

美しい、気持の優しい女性であることは、先程引用した5行目、7行目を読んでも分る。彼女は優しい心の持ち主だけでなく、しっかりした強い女性でもある。気高い考えを持ち、自分の愛の為には勇敢に死を選べる女性である。

このような素晴らしい女性である *unfortunate lady* が自殺をしたのである。自分の愛を貫き通した自殺である。詩人はそんな彼女を哀れみ、深い同情を寄せている。「天上では心から愛することは罪なのか」(6行)と疑問を投げ掛けている詩人は、単にキリスト教で禁止しているから罪であるという考えに止まってははいない。天上における法律上の罪 (*crime*) なのかと疑問を発しているのである。ここでは宗教的な罪、神に対する犯罪という “*sin*” を使っていない。あの世の制度的なものとしても罪になるのかと詩人は反論を唱えているのである。彼女の死後のこの世における評価とは一線を引いているように感じられる。そして、気高い考えを持ち、勇敢に死ぬ人々の為に、天上における救済を求めているのである。

Is there no bright reversion in the sky,
For those who greatly think, or bravely die?

(*Elegy*, 9–10)

詩人は自殺者全員を罪人とは決して考えていない。その理由により罪人から逃れられる者もいると考えている。愛の苦悩から逃れる死、愛を大切に育てている者の自らの死、そういう死を他の自殺者と同列に置くべきではないと考えている。

ここには、偉大な魂は天上に行くというギリシャ・ローマ的な考え方が見られる⁸⁾。「ローマ人の役割を果す」という表現方法からも、単にキリスト教の世界に限らないという考えがこの作品の根底にあると思われる。12行目にある “*Pow’rs*” という単語にしても *OED* によれば「異教の神への適用に源を発する」ということである。これらの単語の使用は、作品の内容と密接に関係があり、ここでは暗示的に使われているようである。

しかし、この亡霊は “*ever-injur’d shade*” (47行) となっているように実際には救済されていない。詩人の考えがどうであれ、その現実は変えられていな

いのであり、彼女の魂はまだ救われていない。

彼女の葬儀は親しい者達によって行なわれないうままであり、彼女の運命に対する同情もない。彼女の臨終に立合ったのは見知らぬ異国の人達⁹⁾である。その人達によって粗末な墓が作られ、哀悼の意が表わされたただけである。詩人はこの状態に対し苛立ちを感じ、一種の開き直った態度を示している。喪服を着た友が嘆き悲しまなくてもよい。大理石の美しい墓石がなくとも、葬送歌がなくとも、神聖な墓地に埋葬されなくともかまうものかと言っている。この詩行では詩人の忿懣やるかたない気持が感じられる。そして、上辺だけの葬儀より、彼女の墓に温かみのある追悼が寄せられているということで、彼女の魂を慰さめ、同情するという詩行へ続いていく。

Yet shall thy grave with rising flow'rs be drest,
And the green turf lie lightly on thy breast :
There shall the morn her earliest tears bestow,
There the first roses of the year shall blow ;
While Angels with their silver wings o'ershade
The ground, now sacred by thy reliques made.

(*Elegy*, 63—8)

彼女の墓は粗末なものではあるが、緑の芝生におおわれ、花が咲き乱れている。最も早い朝露が彼女を慰さめ、最も早く咲くバラの花が彼女の墓を飾っているのである。自然が彼女を哀れみ、彼女の霊を供養している。天使達も銀の翼で彼女の墓に日陰をつくる。宗教上神聖とされるキリスト教の墓地に彼女の墓を作ることは許されなかったが、彼女の遺骨が彼女の墓所を神聖にするのだということまで言っている。ここでは彼女の魂に対する詩人の並々ならぬ同情が感じられる。罪を負い、まだ救済されていない彼女の魂に対し、キリスト教の枠を越えて救済の手段を考えているように受け取れるのである。

自然の恵みはこの世の全ての者そして死者にも別け隔てなく与えられる。まして愛の為に死んだ者に対しては、その死が自殺であろうとも、まず第一に自然の恩恵があると詩人は考えている。ここに詩人の *unfortunate lady* に対する接し方があり、けっして蔑みは感じられない。

生きとし生ける者、たとえ生きている時に美・富・地位があり、名声があったとしても何れは一塊の土になるのみで、時が経てば全て同じになってしまうという詩人の考えが、unfortunate lady に対する elegy としての最後を締め括っている¹⁰⁾。

III

“Eloisa to Abelard” における Pope の愛に対する取り扱い方、そして死というものを考察してみたい。“The Argument” によると Eloisa は美しい人であり、Abelard と Eloisa の愛は薄幸な (unfortunate) ものであった。

この作品は女子修道院にいる Eloisa が Abelard のことを思い、心が乱れている場面から始まる。そして Eloisa の手元にふとしたことから Abelard の手紙が届く。そのことにより Eloisa の心の中に Abelard との楽しかった過ぎし日々のことが思い出され、愛のより大きな苦悩へと陥っていくのである。

Heav'n first taught letters for some wretch's aid,
Some banish'd lover, or some captive maid;
They live, they speak, they breathe what love inspires,
Warm from the soul, and faithful to its fires...

(*ElAb*, 51-4)

Eloisa は Abelard を慕い、知らず知らずに Abelard の名前を口に出し、愛しい人の名前を書いてしまう。Abelard のことを忘れ、神だけに仕えようとしても、Eloisa には Abelard を忘れることが出来ない。Eloisa は Abelard との愛がまだ心の中で大きな比重を占めていることに気付くのである。

Eloisa が女子修道院へ入る誓いをした若い時、Eloisa は Abelard をまだ締め切っていたわけではなかった。誓いの時でさえ、Eloisa の目は十字架の上ではなく、Abelard の上にじっと注がれていた。つまり、Eloisa は Abelard と無理に引き離されるような状態で女子修道院に入ったのである。だから Eloisa にとっては、他によって抑え付けられればられるほど、自由の身にならなければならぬほど、それだけ余計に心の中で愛は想像の翼を大きく広げ羽ばたき

出すのである。

「愛することは罪ではない」と Eloisa に教えたのは Abelard 自身であった。まだ純真無垢な Eloisa はそれを聞き、愛の快い小道へと戻っていく。

From lips like those what precept fail'd to move?
Too soon they taught me 'twas no sin to love.
Bank thro' the paths of pleasing sense I ran,
Nor wish'd an Angel whom I lov'd a Man.
Dim and remote the joys of saints I see,
Nor envy them, that heav'n I lose for thee.

(*ElAb*, 67—72)

「愛することは罪ではない」という言葉は、Eloisa の心に強い衝撃を与える。ここに使われている “sin” とは「宗教上の罪」ということである。宗教的に罪にならないという Abelard の言葉は Eloisa にとっては力強いものである。そして Eloisa は肉体を持つ Abelard を愛し始める¹¹⁾。Abelard の為ならば天を失ってもかまわないという所まで、Eloisa は愛情を募らせてしまう。

愛が実り、幸せな結末を迎えるということは、幸せな結婚をするということであろう。Eloisa が Abelard との結婚を夢見る時の描写がある。結婚について悩む時、Eloisa は愛が作った掟以外のものを呪っている。名声・富・名誉などは愛にとってみれば何の価値もなく、消え去ってしまうものだと考えている(73—4行)。Abelard との愛を大切にし、何にもまして Abelard の妻になることを Eloisa は望んでいる。お互いが自由に愛し合えることは天上の喜びであるとまで思っている。

愛の激情に溺れる Eloisa も作品が進む内に神のことを思うようになる。神に仕える身としての Eloisa の反省が詩行に表われるようになる。しかし、これは大体において Abelard のことを思い、苦悩する直後に神のことを思うのである。敬神の心は徐々に大きくはなってくるが、Abelard のことを忘れ去ってしまうというわけではない。「私を助けて下さい」と神に祈る Eloisa の心が敬神からか絶望からか彼女自身には分らない(179—80行)。

Eloisa の愛の苦悩は女子修道院の宗教儀式をも邪魔するようになる。朝の

お祈りの時、賛美歌の時にも Abelard のことを考えるようになる Eloisa は、愛に狂ってしまうのではないかと感じられるのである。

死について考える描写がある。

Yet here for ever, ever must I stay ;
 Sad proof how well a lover can obey !
 Death, only death, can break the lasting chain ;
 And here ev'n then, shall my cold dust remain,
 Here all its frailties, all its flames resign,
 And wait, till 'tis no sin to mix with thine.

(*ElAb*, 171—6)

Abelard のことだけを思っている Eloisa でも、女子修道院を抜け出そうという気持にはなっていない。死ぬまでこの憂鬱な女子修道院に居る決意は固いのである。永遠に女子修道院に留まらなければならないと考える Eloisa は、死だけがその「不変の鎖」を壊すことが出来るものだと思っている。そして死ぬ時も女子修道院である。自分からその境遇を打開し、自らの手でその鎖を壊そうとまでは考えていない。

Eloisa の愛の苦悩は次第に落ち着いてくるようになる。Eloisa が謙虚な気持になり、神のことを考えると、自分の回りにある神の慈愛に気付くようになり、Eloisa の魂に神の恩寵が現われ出すのである。

While prostrate here in humble grief I lie,
 Kind, virtuous drops just gath'ring in my eye,
 While praying, trembling, in the dust I roll,
 And dawning grace is opening on my soul...

(*ElAb*, 277—80)

Eloisa に対する神の救いの手が、Eloisa に分かり出すのである¹²⁾。

Eloisa への救いに関しては精霊の言葉も重要な役割を果たしている。かつては愛の犠牲者であった精霊が Eloisa に語りかける。そして、嘆き悲しんでいる Eloisa をその精霊は自分の居る世界へ招くのである。

Come, sister come ! (it said, or seem'd to say)

Thy place is here, sad sister come away !
Once like thy self, I trembled, wept, and pray'd,
Love's victim then, tho' now a sainted maid :
But all is calm in this eternal sleep ;
Here grief forgets to groan, and love to weep,
Ev'n superstition loses ev'ry fear :
For God, not man, absolves our frailties here.

(*ELAb*, 306—19)

永遠の眠りの世界では苦悩することも涙することも無い。その世界では、人間の弱さ・薄志を許してくれるのは人間ではなく神なのだ。この詩行で *Eloisa* は神への思いを新たにす¹³⁾。死の国とは *Eloisa* にとって神の国である。神に敬虔な者が行ける世界である。贖うことが出来ない宗教上の罪を犯した者は行くことが出来ない世界である。*Eloisa* は *Abelard* への愛に燃えてはいるが、そのような大罪は犯していない。*Eloisa* は *Abelard* への愛の為に、神を冒瀆するような思いにかられてはいるが、それは *Abelard* への愛情を自制出来ない為であり、故意に神に反抗しているわけではない¹⁴⁾。彼女は決して神を捨て去ってはいないのである。捨て去るどころか神に救いを求めている。*Eloisa* の神への思いは強くなっていく。だからこそ神の恩寵が現われ出し、*Eloisa* にそれが見えてくるのである。それはキリスト教の教義を守っている *Eloisa* だからである。

Abelard と交わることが罪でなくなるまで自分の軀に待たせる (176行) という *Eloisa* の考えからもそれは分る。あくまでも女子修道院、つまりキリスト教の世界で生き抜くという *Eloisa* の決心である。これは女性としていじらしいものである。死後に *Abelard* と結ばれたいと願う *Eloisa* は、キリスト教における罪、それも死後に贖うことが出来ない罪は犯したくないのだ。このことがある為に、*Eloisa* にはいかに *Abelard* への恋慕の情が募ろうとも、神を捨てることが出来ないのである。そこには聖職者である *Abelard* を思い遣る *Eloisa* がいる。神を思う敬虔な *Eloisa* の心もあるのだ。

詩人は *Eloisa* の愛の苦悩を表現しているが、最終的には救済の手を差し延

べている。この世における愛は実らなくても、同じ墓に入りたいという *Eloisa* の願いを否定してはいない。*Eloisa* の愛に賛美を送りつつ、この世で実らない愛に身を置く *Eloisa* に同情を寄せているのである。

IV

両作品を比較して最初に気付くことは、主人公である *unfortunate lady* も *Eloisa* も共に美しく優しい女性として描かれていることである。そしてその女性達が愛ゆえに苦悩するのだ。その愛は兩人とも結婚という幸せな結末になってはいない。一方は愛が為に自殺をし、他方は愛が為に女子修道院で余生を送る。つまり、自殺をした婦人も *Eloisa* も共に *unfortunate* なのである。

その愛がどんなものであるのかということに関しては、*Eloisa* の方しか分らない。*Abelard* を愛する *Eloisa* の心情は作品で綿々と綴られているが、*unfortunate lady* の方にはその詩行がない。しかし、自殺をするまでに思い悩んでいたことからすれば、普通の愛情以上に切々たるものがあつたはずである。愛は何ものにも代え難いものであるということは両作品に描写されている。*Eloisa* は富・名声・名誉は何ら価値がないと思っているし、*unfortunate lady* は自分の命を愛ゆえに投げ出したのである。

愛に関する詩行に注目すべき箇所がある。一方は詩人の問い掛けとして “*Is it, in heav'n, a crime to love too well*” (*Elegy* 6行)、他方は *Abelard* が *Eloisa* に教える言葉として “*'twas no sin to love*” (*ElAb* 68行) と書かれている。この2行の意味には、詩人 *Pope* の愛に対する考え方が表わされているのではないか。

前者は “*in heav'n*” という場所の限定があるが、後者には場所の限定がない。これを考えると *Abelard* の “*'twas no sin to love*” の方が一般的に言える言葉のようである。無論 *love* から起こる行為は別問題である。

前者は “*crime*”, 後者は “*sin*” という単語が使われているが、これはやはり「法律上の罪」と「宗教上の罪」の違いからくるものであろう。天上において、心から愛することは、天上の法律にてらして罪になるのかという問を発し

ている詩人の心の中には、Abelard が Eloisa に教える普遍的な真理とも言えるものが当然のこととしてあるように思われる。愛そのものはいかなる罪にもならないという愛を賛美する詩人の姿勢がうかがえる。「自殺は罪なのか」との問い掛けは、詩人の愛に対する考えをさらに押し進めたものであり、天上でもこの世でも愛というものは素晴らしいものであるはずだという認識である。

両作品に描かれている愛はこの世ではむすばれない不運な結末に終わっているが、死後の魂を救済したいという詩人の気持は感じられる。“Elegy”の方は *unfortunate lady* の粗末な墓に対する「自然」の哀れみ、同情であり、“Eloisa to Abelard”の方は、Abelard に看取られてキリスト教にのっとった葬儀をし、同じ墓に入りたいという Eloisa の願望である。

さて、愛自体は罪ではないとしても、愛から起こる行為についてはどうであろうか。

自殺した *unfortunate lady* はキリスト教では明らかに罪を犯している。その為、親しい者達によって葬儀がなされないばかりではなく、哀れみも同情も注がれてはいない。彼女の魂は救済されることなく、永遠に傷ついている。キリスト教における罪を犯した者に対する、この世に実際に行なわれている処罰を無理に変えようと詩人は思っていない。その現実を踏まえて、救済の手段を探しているのである。その結論は当時の擬古典主義の風潮、そして古典を模範としている詩人 Pope からいえば当然ともいえるものである。気高い勇敢な死なら認めよう、それも愛ゆえの死ならば、たとえそれが自殺であっても認めようという態度である。人間の死の原因が価値あるものなら、死後その人間の魂まで苦しめることはないのではないかということである。

ローマカトリック教徒である詩人は、自分の考えをキリスト教の教義に立脚していることは確かである。しかし、作品においてキリスト教の範囲を越えていることもまた確かである。何とかして *unfortunate lady* の魂を救済してやりたいという願いと、実際には救われていないという現実、その狭間に苦悶する詩人が感じられる。結局、現実には現実として認め、その上でギリシャ・ローマ的思考を持ってきて救済しようとしているのである。そこには一種の開き直

っている詩人の態度も感じられる。

Eloisa の方は、Abelard の言葉で愛は悪いことではないという確信を持ってしまう。女子修道院に入る時も Abelard を愛していたし、その後も Abelard を忘れることはない。偶然手にはいった Abelard の手紙は Eloisa の愛に再び火を付ける。Abelard の愛を失うことは自分の全てを失うことと同じだと思い込むまでに、Eloisa の愛は熱く燃え上がる。「不変の鎖」(E1Ab 173行)を壊すことが出来るのは死しかないと分っている Eloisa でも、自殺という行為までにはむすびついていない。神と Abelard との愛の葛藤を繰り返していても、Eloisa には神を捨て去ることが出来ないのである。そして作品には神に近付いていく Eloisa が描写されるようになる。だから神の恩寵が Eloisa の前に現われてくるようになるのである。

Eloisa には神に背く行為をする意志はない。それは Abelard と一緒になることが罪 (sin) でなくなるまで自分の軀に待たせるという表現でも分かる。神に許されないほどの罪を犯すことが出来ないのである。だから Abelard の言葉に “sin” という単語がどうしても必要であり、ここで “crime” という単語では何ら意味をなさないのである。Eloisa が “sin” を犯さないということで、“God, not man, absolves our frailties here” (E1Ab 316行) という精霊の言葉も生きてくる。Eloisa はあくまでもキリスト教という枠の中で、愛に苦悩するのである。

愛に対する Pope の考えは、賛美以外の何ものでもない。愛の苦悩は愛する者の常として是認し、その愛から生じる結果に対しては、その愛が純粋なものであればあるだけ寛大な気持で称えていこうというものであることが分かる。自然もそれが為には哀れみを持ち同情している。罪を犯し、まだ救済されていない unfortunate lady の遺骨が、その墓所を神聖にするとまで詩人は表現している。それならば、Abelard を愛しただけの Eloisa はなおさら救われなければならないのである。

愛を賛美する気持、そしてその死が気高いものであれば、特に愛ゆえの死であれば、それを認め、応援しようという Pope の考え方は両作品とも一貫して

流れているようである。

注

- 1) Peter Quennell, *A History of English Literature* (Springfield: G&C Merriam Company, 1973), pp. 205-6 において次の記述がある。“... he ... might possibly be described as the first of the English Romantic poets; for among the collected *Works* that he issued in 1717 are two memorable ‘Gothick’ poems, ‘Eloisa to Abelard’ and his ‘Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady’ that, with their air of mystery, melancholy and brooding ‘horror’, anticipate the spirit of late eighteenth and early nineteenth-century verse.”
- 2) Donald B. Clark, *Alexander Pope* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1967), p. 66. 1717年に *Works* の中に入った時は “Verses to the Memory of an Unfortunate Lady” という題であった。1736年 Pope は詩の題を変えた。
- 3) *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, ed. Alex Preminger (Princeton: Princeton University Press, 1974) の “Elegy” の項に代表的なエレジーの各作品があがっており、Pope の作品も含まれている。
- 4) Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope II*, ed. Geoffrey Tillotson (London: Methuen & Co. Ltd., 1972), p. 328. “The Argument” 中にある。尚、以下この小論で引用する Pope の作品は全てこの版による。詩の引用行数の前にある *Elegy* は “Elegy to the Memory of an Unfortunate Lady” を、*ELAb* は “Eloisa to Abelard” を略した記号である。
- 5) *Ibid.*, Tillotson の “Introduction” 中にあり。pp. 355-6.
- 6) 詩の1行目にこのような意図があるということは、*Pastorals* の “Spring” の1行目にある “Hear” という単語を思い出させる。
- 7) “love-darting” は “shooting glances indicative of or inspiring love” (*Lexicon to the Works of Milton* by Laura E. Lockwood) の意味を取る。
- 8) Maynard Mack, *Alexander Pope, A Life* (New Haven: Yale University Press, 1983), p. 313. Mack は “Elegy” の24行目を出して「ヘラクレス、ガニューメデスそしてロムルスのためのジュピターの行為」を思い出させるものだとしている。ただ、Unfortunate lady は “the unqualified greatness of soul” を持っているとしているが、これはこの小論とは別の問題なので、ここでは扱わない。
- 9) これは「自殺者を埋葬する人々」と「ギリシャ神話における人々」という意味が重なり合っているのだろう。
- 10) Geoffrey Tillotson, *op. cit.*, p. 357. 彼は “the personal coda” と言っている。

11) *ELAb* 337-8行に次の様にある。

“Then too, when fate shall thy fair frame destroy,
(That cause of all my guilt, and all my joy)...”

12) 拙論「Eloisa と神の恩寵」を参照。*EBARA REVIEW* 第2号（野村行信先生還暦記念号）に掲載。

13) Geoffrey Tillotson, *op. cit.*, p. 302.

14) David B. Morris, *Alexander Pope* (Cambridge: Harvard University Press, 1984), p. 136.